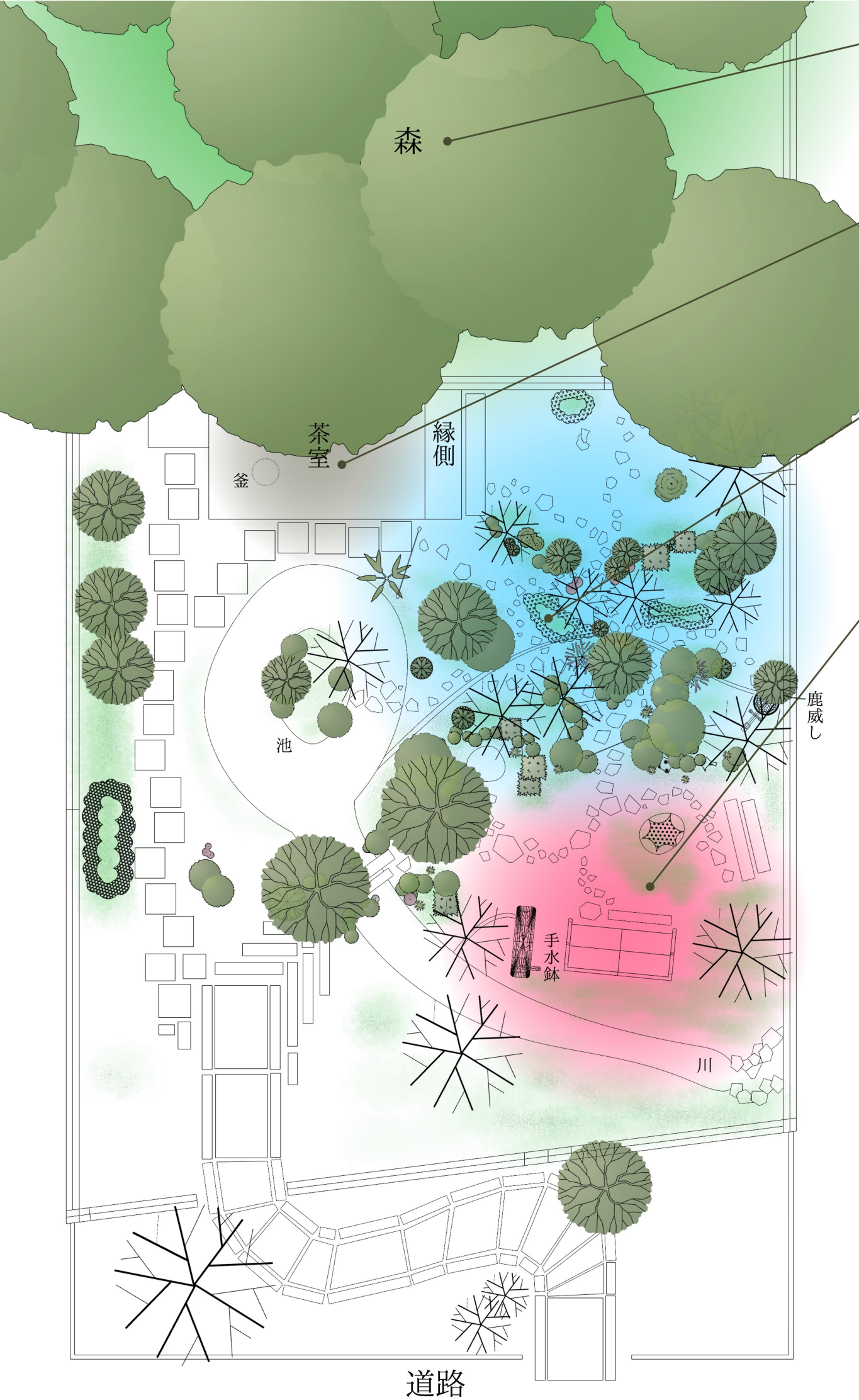




森

今までの三つのエリアは、音のある「静寂」に包まれた落ち着いた空間だった。しかしここでは一転し、音のない真の静寂へと変化する。この急激な変化と高くそびえる木々が空間に神聖さと畏敬の念をより一層強くもたらす。

茶室

外の明るさとは対照的に、茶室は薄暗く落ち着いた空間となる。釜が沸騰する「シュー」という音が静かに満ち、包み込むように広がる。この空間で人々が一杯の茶に向き合うことで心に静かな変化が生まれる。

内露地

木々に囲まれたり、開かれたりしながら変化する木陰の空間。静けさの中に、茶室から微かに聞こえる釜の沸騰する「シュー」という音が漂い、時折、鹿威しの「コーン」という音がアクセントを添える。

外露地

開けた空間に広がる川のせせらぎや手水鉢に落ちる水音。さらに、堀によって和らげられた道行く人々の生活音が溶け合い、まるで田舎の家にいるような穏やかな安心感をもたらす。

心移(こころうつろう)

コンセプト

和の空間の魅力のひとつは、心を鎮める場であることだ。しかし、一口に「心を鎮める」といっても、その空間には多様な在り方があり、それぞれが異なる心の機微をもたらす。その違いを生む大きな要因のひとつが、周囲の環境の変化ではないだろうか。

私自身、幼い頃に近所の神社の裏山を訪れた際、その変化を強く感じた経験がある。住宅街や道路を走る車の音が突如として消え、裏山に足を踏み入れると、そこには心地よい静寂が広がっていた。このわずかな数十秒の移動によってもたらされた劇的な変化に、私は深く感動した。

この庭では、そんな心の移ろいを生む要素の変化を丁寧に組み込み、訪れる人が自身の感覚と向き合える空間を目指している。

心の移ろいを生む要素 一音、視覚、導線一

	外露地	内露地	茶室	森
音の変化	ベース (環境に溶け込む「静寂」な音)	外部からの声や歩き音 手水鉢の水音 自らの飛石を歩く音(注1)	川の水音 かすかに聞こえる釜の沸騰音	部屋を包み込む釜の沸騰音
	アクセント (意識される音)	外部を通る車など かすかに聞こえる鹿威し	自らの飛石を歩く音(注1) 鹿威しの音	お点前の音 (袱紗捌きや茶を立てる音)
視覚	開けた空間 開放感 外部とのつながり	木により適度に囲まれる 足元にも注目が行く(注2)	薄暗い空間	自身の何倍も高いところまで木々に囲まれる 神聖さや畏敬の念
導線	直線的な導線 奥行きを意識させる 一緒に訪れた人と共に歩く	複雑で分岐する道 各々が道を選ぶ(一人で歩く)	部屋の人々が共に茶に向き合う 部屋の人々との連帯感	道がなく自由に歩き回る
	外露地	内露地		

(注1, 2) 外露地から内露地に入ると飛石の間隔が開くことで飛石を歩く音のリズムは遅くなり、下を向いて石の存在を意識して踏むことになるため、外露地ではベースの音であった「自らの飛石を歩く音」が内露地ではアクセントの音になる。また視覚的にも足元を意識することになるので「一度下をしっかりと見てから上を見上げる」という視覚上の変化が外露地から内露地にかけて起こる